

GRADUATE SCHOOL OF BUSINESS ADMINISTRATION

KOBE UNIVERSITY

ROKKO KOBE JAPAN

Discussion Paper Series

論 題 「わが国の近代保険導入における福沢諭吉の「創発効果」」

報告者 神戸大学大学院経営学研究科：高尾厚

鍵概念：

創発、相転移、進化経済学、複雑系、触媒効果、自己組織化臨界、カリスマ性、非線形構造、物性物理学、森羅万象、経路依存性

第 1 章：序

わが国保険市場は現下、内・外生的条件の激変により、まさに混沌(chaos)状態にある。端的には保険市場が「縮小・萎縮傾向」にあるようである。¹⁾世界でも数百年来、未曾有といわれる超低金利が永続中の日本である。

このような外生的な条件下、生保市場では需要サイドの「被保険者の稼得力」自身がデフレ化傾向に加え、有史上稀に見る長期の超金利政策 パブル崩壊対応の遅鈍さが主因らしい。下の資産運用難で、予定利率を遙かに達成できず、ひいては「逆鞘」の重圧に耐えきれず、1996年4月の新保険業法施行後わずか6年強経過して、7社が倒産した²⁾。その大半が、資金調達自由度が株式会社に比し小さく、かつまたコーポレート・ガバナンスに致命的欠陥をもつ相互会社(田村[1985]、高尾[1999])である。

かたや、損保市場では、「戦後最初」(1949)に創立された相互会社「第一火災」が日本人の心性と往時の規制された金融市場での金利とを巧みに結合させた、節税効果もある画期的商品・満期戻し火災保険を「火災相互保険」として1963年に「本邦最初」に発売した。往時、大手損保のMOF担と癒着した大蔵省は「新保険商品にはわずかの創業者利益のみ」の原則で、5年間の待ち期間後、最大手・東京海上始め損保他社に、類似商品「長総」の発売を認可し、彼我の販売網に大差があったため、市場占有率は瞬く間に反転した。

かくてこの損保会社1社も「戦後最初に」(2000)倒産した。皮肉なことに、良くも悪くも「本邦戦後最初」の4セットの烙印を同社は押されて、損保市場からの退出を余儀なくされた。

このような、保険市場の現状にあって、過去の経験に学ぶことは、無駄なことではないだろう。「温故知新」。本稿は、有り体にいえば「惨憺たる」わが国保険市場を早急に修復するための「特効薬」ないし「処方箋」を提示することを目的としないし、筆者はその力量もいまだもたない。

むしろ、本稿の目的は、水島[2002]のいわゆる「近代保険」が明治期、すなわち、近代保険制度が浸透していない時代に、何故、日本人が近代保険の有用性を比較的容易に理解でき、生損保とも、他の東洋諸国 これらの大半の国(中国、フィリピン、インド、ベトナム、インドネシア等)は、欧米諸国植民地化(政経、司法、立法の裁量権を完全に掌握される)への別の経路をたどる とは違い、「相対的に」急速に浸透したのかについて、検討する。

当座得られた結論は、イスラム圏のように保険取引を異物視³⁾しない地盤に、3回の洋行で西欧米を見聞して、したためた福沢諭吉の「西洋旅案内」(1867)「西洋事情初編」(1866)「同外編」(1868)「同二編」(1870)が、好奇心旺盛な多くの日本人に爆発的に読まれ⁴⁾日本人の心に共鳴感を与えたもの大なり、というものである。なお、このような混沌状態が偶然な契機で整序化 自己組織化(self-organizing) する効果を「創発」(emergence)

5)効果と、定義する。

注：

1：これらは生損保の、直近のファクト・ブックで一目瞭然である。なお、本邦最大の生保・日生ですら、今年 11 月 14 日の社員総代懇談会での経営陣の現状報告では、日経平均株価が 7900 円を下回ると同社の「含み益」は消失する。また実体験としての筆者が公務員として任官以来、26 年経過する。が、人事院勧告で「ベース・ダウン」の語句を聞いたのは、今年が最初である。

2：田村[1999]の実証によれば、保険会社の倒産原因の大半は、この資産運用の失敗である。

3：Zeizer[1974]（田村訳[1994]）によれば、イスラム圏の大国・リビアでは、生命保険はコーランの教義に反する背徳制度として、禁止されている。一種の「イスラム原理主義」であり、最近のプロテスタント諸国に対する「国際テロ」に通じるものがある。

4：これらは往時の人口に照らせば、「ベストセラー」であった（広田昌希、『日本大百科辞典 CD 版』「福沢諭吉」の項、平凡社）。

5：emergence という用語を「創発」と和訳するのに違和感が皆無ではない。しかし、中島文雄編『岩波英和大辞典』539 頁 2 段目では哲学・生物学用語として、この和訳語を当てている。他方、新村出編『広辞苑（第五版）』[1999]には「創発」という和語は出てこない。未だ人口に膾炙していない証拠であろう。

第 2 章：森羅万象における「創発」 新古典派経済学への疑問

本稿での基本的立場は、社会経済現象が、物理現象、とくに、古典的なニュートン力学が支配する場でのありようとは、相当に相違する、という「至極当然」なものである。だが、筆者も非力ながら、この分野に興味をもって学界に参入して、四半世紀が経過した。その間、佐和[1982]、酒井[1991]¹⁾と同様に、壮麗な体系をもつ新古典派経済学が日本の土壌で有効なのかにはつねに疑問を抱いていた。

一方で古典物理学に貫徹する法則は典型的には、ニュートンの「万有引力の法則」である。これは、地球上でも月面上でも、さらには太陽系内外でも貫徹すること ロバスト性 (robustness) が確認されている。

ところで、古典力学は「原子論」(atomism)的な方法をとるため、人間には太陽のような「巨大恒星」すら、あたかも大きさのない「質点」と「見なして」(フィクション化²⁾して)太陽系の運動を説明している。要するに、ニュートン力学では、太陽圏の動きは、「恒星」、「惑星」、「衛星」と命名された「質点」同士の引力で説明される。そして、ガリレオがいみじくも告白するように、古典物理学では「自然界は、数学という言葉で記述された書物である。³⁾」

ところで、周知のように、数学は、総合と分解とが「可逆性」をもつ これにより「同値命題」の連鎖 (tautology) により論理的なノイズを遮断しながら精緻な論理展開ができる という意味で極めて「強力な言語」である。だが、その後の物理学、特に、量子力学は、このように対象物を細分化すると、対象物そのものが「全体としてもつ性質」を捨象する危険性を指摘する。また、物理学の一領域の「場の理論」では、分析者と対象物との関係は確率的にしか定まらないという⁴⁾。このような立場を、全体論 (holism) という。

ところが、不思議なことに、経済学、とくに近代経済学は、この古典物理学の方法を相当部分模倣して構築されている。その主因は、自然科学の内で、生物学、化学、博物学、

地学などより、古典物理学がロバストな法則を保持していたからであろう⁵⁾。この意味で、自然科学の祖父は、「ニュートン古典物理学」であろう。そして、不思議にも元物理学者ながらノーベル経済学受賞者となったのは、P.サムエルソンである。受賞対象は著書『経済分析の基礎』(The Foundation of Economic Analysis)⁶⁾である。同書では社会経済現象を物理現象に似せて(フィクション化し)数学的に記述され、幾多の法則が列挙されている。

かくて、彼の功績は、経済学を「社会科学の女王」と門外漢に言わしめたことである。そして米国経済学界では、数理経済学が頂点に立ち、計量経済学が後を襲い、数学で解きたい経済史学などは現在まで下層に位置づけられてきた⁷⁾。だが、最近、このような経済学のハイアラーキー化に反旗を翻す学派 オーストリア学派⁸⁾が中心 が注目されている。その中でも、最も注目されている領域の1つは、「進化経済学」の領域である(江頭[2002])。この進化経済学では、人間社会を、その構成員がH.A.サイモンのいわゆる「限定合理性(bounded rationality)」しか持ち得ず、それゆえ、行動変更は瞬時には不可能で(inertia)、その行動変更は大局的な観察でなく、当該時点でみた最適案を採用し、遠い将来まで見通せない(myopia)、ある主体は既存の行動から革新的な代案に果敢に乗り換える(trial and errors)という好奇心をもち、結局は1種の「生物体」のように把握する。従って、新古典派経済学のように、社会経済を「ゼンマイ仕掛け」の時計のようにみなし、時計の遅れ、則ち「部品」の故障とはしない(cf. Leibenstein[1976])。

進化経済学では、現実の生物界のように、経済社会に「突然変異」「棲み分け」「種の断絶」などは十分ありえる現象で、それを直視し、そこに潜む論理を探索しようとする、いわば、「古くて新しい」経済学である。われわれは、この学問の成果を摂取して、わが国への近代保険の移植・定着の過程を検討してみよう。次章では、欧米旅行記「西洋旅案内」で現代の保険制度に相当する「請合」(彼の耳にはイシューランスと聞こえている。)の制度を大いに喧伝した⁹⁾、福沢の近代保険受容の「創発」^{うけあい}効果を吟味し、彼なくば、いかほど、近代保険制度導入が遅延し、わが国の経済的「離陸」も遅延したかを検討する。最終章は、本稿の要約と残された課題との指摘である。

注1: 同氏は、長い米国での研究・教師生活に照らしてわが国社会経済風土にあった「土の香りのする経済学」を樹立しようと唱道する。

注2: この用語法は、村上[1975]による。

注3: 解読できないものはノイズ 誤差項 にすぎなかった。

注4: 「日本放送協会」(NHK)は、数年前、科学知識啓蒙のため「アインシュタイン・ロマン」というタイトルのシリーズものを放映した。筆者にとって、その最後の番組でのナレーターの印象的なエピローグがあった。その概要は以下のような内容であった。「ニュートンの古典力学」から「アインシュタインの相対性理論」までは、音楽の脈絡で比喻すれば、バッハを開祖とする「ドイツ古典派(クラシック音楽)」に相当し、既定の楽譜を忠実に再現することが最重視されるいわば「確定的な音楽」である。これに対して、マックス・プランクを開祖とする「量子力学」を、「米国黒人の多くが愛好するジャズ」に喩えていた。これは、クラシック音楽と対照的に、ジャズの楽譜はあくまで荒い基本型であり、実際に演奏されるジャズは、その場の演奏者と聴衆者との間の雰囲気「アドリブ」が許される、いわば「確率的な音楽」であることを意味している。

注5: 現に、「ケプラーの3法則」も、ニュートン万有引力の法則に収斂する。「原子論」は「方法論的個別主義」ともいう。村上[1975]は自然科学のなかで、物理学が最重要視さ

れたのは、「孤立系の信念」からという。この信念は、物理法則は、生物学、化学、地学などの体系を一方向的に規定するが、逆方向はない、というものである。

注 6：同書の第 1 章のタイトルの右下には「数学も言語なり」（ギボンズ）の引用文があり、同書の内容を冒頭で暗示している。

注 7：レイヨンフーフドによる「ECON 族の生態」という寓話を佐和[1982]は紹介し、この現状を批判している。

注 8：その頂点にハイエクが位置することについては、江頭[1999]参照。

注 9：これが、水島[2002b]のいう「上から近代資本主義化」の一環なのか、「下方からの自生的な近代保険」と評価すべきは、当座、筆者の能力では判定できない。

- - - - -

第 3 章：わが国の近代保険導入における福沢諭吉の「創発効果」

1762 年、英国で世界初の近代的生命保険会社、The Equitable が設立されるには、多くの人の知見が与している。特筆すべきは、当時 46 歳の 1 歳違いで保険加入を謝絶された、数学者 James Dodson[1710-1757]が平準保険料制度を考案、それに先立ち、有名なハレー彗星の発見者、Edmond Halley[1656-1742]が、人間の寿命にも「大数の法則」が厳然として 本人の意思に無関係に 成立することを、1693 年に「哲学論叢」誌上で「ハレーの死亡表に関する研究」として公表したことであろう（（財）生命保険文化センター[1976]）。以後、近代資本主義経済の「縁の下の力持ち」を必要とする欧米諸国に、近代保険の技術移転がなされていく¹⁾。

さて、欧米列強が産業革命で余剰生産物のはけ口を求めつつある折り、日本は隣国・清が阿片の密貿易取締失敗²⁾を契機に英国の植民地となる情報を、細い対外情報収集地・長崎出島のカピタンから入手し、鎖国中の国土警備を堅固にする。しかし、彼我の軍事力につき、300 年弱の我が国の情眠中に大差がつき、砲艦外交の急先鋒・米国の東インド艦隊指令長官ペリーは 1853 年に浦賀に来航し、開国を迫る。その翌年、日米和親条約、日露和親条約、58 年日米修好条約と次々と、その他の西欧諸国とも同様に 不平等条約を余儀なくされる。1867 年、統治能力を喪失した徳川幕府は「大政奉還」し、翌年（1868）、福沢は慶應義塾を創立する。その後も国内政治は安定せず、まさにカオス状態がほぼ日清戦争（1894）まで永續し、日本各地で、徴兵制・租税金納（地租改正）など、「国民国家」（nation state）として、西欧帝国主義国と伍するに必須³⁾の政策に反対する一揆が日本各地で頻発する。大久保利通はその代表的な犠牲者であろう。筆者は、歴史専門家ではないが、今の日本経済を回想させる混乱ぶりであったかもしれない。

以上、福沢の「創発」効果が発揮される背景を一瞥した。以下、彼の幼少期からの特異性に眼を向けよう。

彼は、中津藩大坂蔵屋敷で生誕（1834:天保 5 年）し、往時の大坂のリベラルな精神風土を幼少期に「刷り込まれた」形跡がある。筆者は小学校時代の教科書に、彼の兄から、中身空虚な書物を跨いだことを叱責された彼が、形式主義に束縛された兄に大いに反論したという、下りがあったことを記憶している。要するに、往時には「何であるか」（SEIN）ということは無意味であって、今や「何をできるか」（KÖNNEN）の時代に移行していることを、幼少期にすでに知覚していたのである。

その後、長崎で蘭学を修得後、西欧の先進医学を摂取した、大坂在の緒方洪庵の「適塾」に入塾するが、往時の「病人の治癒」よりも「社会の病気治療」が先決問題と判断したら

しく、「経済学」の「大衆化」が往時日本の「喫緊」の至上命題と確信する。明治政府も「脱亜入欧」「富国強兵」を促進すべく、東京を起点に北端は小樽から西端は長崎まで全国の貿易・商業都市に、国立の「高等商業学校」を設置する⁴⁾これに対し、法律学の分野は国立では「旧帝国大学」以外に「単科法科大」「高等法律学校」は設立されない。「急速な欧米へのキャッチ・アップ」「欧米による植民地化回避」の至上命題のためには、庶民の法知識の浸透が阻害要因 江戸幕府の人民統治を踏襲し、「由らしむべし、知らしむべからず」が国家の恣意的運営に便利である。 となりかねないと往時の為政者が直感したせいかもしれない。この事実は別稿で検討することとし、本来の福沢の「創発」効果に立ち返ろう。

この命題は、量子力学の一領域である、物性物理学における一大発見からの類推援用である。1948年、米国ベル研究所員、ショックルリー、パーディーン、プラットンらは、絶縁体の「相転移」⁵⁾現象を確認した。具体的には、それらは、元素周期表の4B族で本来「絶縁体」のSi,Ge,Seなど元素の純度、99.9999999(通称テンナイン)%のものにわずかのAs,Pの異元素を混入すれば、以前と物性が激変すること、つまりは「絶縁体が半導体になる」、ひいては検波作用・整流作用・増幅作用・スイッチング作用と多様な性質をもつという、物性物理学における画期的発見である。後のコンピュータの「種子」となるこの功績に対して1956年、ノベル物理学賞がこの3人に与えられた。

これをどのように援用するか、筆者はいまだ「暗黙知」の段階で、これを「意識知」に変容する段階までに到達していない。ただ、現下は、「複雑系の経済学」でいわれる「混沌」状態が、偶然的な契機で、一つの秩序にそって「自己組織化」することが、森羅万象にみられる、という学説が、明治期以降の日本での近代保険浸透過程に援用できるのではないかと推測する。森羅万象の3例を、科学シミュレーション[1997]から引用すれば、「心臓の拍動リズム」⁶⁾「メダカ同士の衝突を回避しながらの集団遊泳」⁷⁾「蟻地獄の巣穴の安息角」⁸⁾と、3例とも、直接的には何の関連もない現象のいずれにも、外生的な攪乱項が生起しても、種の存続・繁栄を目指して、復元の方向に導く「創発」現象がみられる。

近代保険の日本浸透も、鎖国を外圧により強制的に取り払われた、「リスク負担秩序」が動揺した時期に、先見の明もカリスマ性ももった福沢が、より経済効率的な近代保険制度を紹介するだけでなく、自らも本邦初(1881)の近代的な生命保険株式会社・明治生命に、総額十万円振込の資本金に対する株式引受人11名のうちの一人となり、千円を引受た、との史実がある⁹⁾。まさに、陽明学にいわゆる「言行一致」による日本の近代保険発展への彼の「創発」効果は多大なものがあったであろう。

- - - - -

注1：(財)生命保険文化センター[1976]、pp.46-7のクラスタ図は読者の理解を一目瞭然にする。同図で、黄色で示された日本の急速な拡張・浸透過程は刮目すべきである。なぜならば、極東の一小国が、欧米に伍しているからである。なお、より正確な保険普及度につき、稿末の図1を参照。

注2：陳[1971]には清朝のエリート官僚が、英軍艦の発射する大砲弾道の正確さに驚き、「悪魔のしわざ」と信じ、「魔よけ」の儀式を執り行った下りがある。いうまでもなく、弾丸の軌道はロバスタな「ニュートンの万有引力の法則」に沿って決定され、「まじない」でその軌道が変更することはない。往時の清の科学知識は、蘭学を鎖国中も取り入れていた日本より大きく立ち遅れていた。これに対して、日本は合理主義精神を受容する土壌を13世紀頃はいくばくか持っていた。その史実として鎌倉仏教の一派の浄土真宗の8代法主蓮如は「於流為病人加持祈祷等不可有及次第也。堅可停止事。(当本願寺流においては、

病人のための加持祈祷など、あるべからざる次第である。堅く停止するべきである。) 」と遺言している。(真継[1985]121 頁、高尾[1993])

注 3：司馬[1988]は、「国民国家」の観念のない民族が、欧米の植民地支配の対象となる運命になることを指摘する。典型的には、米国インディアン、トルコ・イラク国境のクルド人、欧州大陸を放浪するジブシー(チゴイナー)、北アイルランド人、北東スペインのバスク人を挙げる。現在の中東紛争(イスラエルも含み)も然りである。司馬[1988]によれば、わが国でもこのような観念は、少なくとも「白虎隊」の悲劇で有名な「会津戦争」(1868)のころまで希薄であって、日露戦争(1904)での戦勝を契機に明確に意識されだした。

注 4：江戸時代を通じて「天下の台所」を自負していた、往時日本最大の商都・大阪にこの種の学校は当時の帝国議会の投票の際に「1 票差」で否決され(天野郁夫 [1993] 135 頁、および 319 頁、神戸大学百年史編集委員会[2002]98 頁)、近隣の神戸市に第 2 高等商業学校が設置される(1902)。面子をつぶされた大阪市は自前で、「大阪市立高商」を設立し、この後身が現大阪市立大である。国立第 3 高等商業学校は 400 年の貿易都市を誇る長崎に 1905 年に設立される。(なお、天野[1993]320 頁には[明治 37(西暦 1903)年、大阪市立高等商業学校創設]とある。他方で、大阪市立大学の 2002 年 11 月 30 日現在の HP(<http://www.osaka-cu.ac.jp/rekisi.html>)に掲載されている大阪高等商業学校創立時点は、神戸高商創立の前年の 1901 とあり、錯誤がみられるようである。)

注 5：「相転移」(相変化ともいう)は自然界では、希有現象ではない。ここに「相」は「物質の微視的構造が規定された状態」(水谷 仁「相転移」『日本大百科全書』CD 版)をいう。卑近な相転移は、水の様相変化にみられる。1 気圧下では摂氏 0 度以下で「固体」、0 度から 100 度までは「液体」、100 度以上で「水蒸気」の相をとるものの、その分子記号は H₂O で同一ある。

注 6：概要については、稿末の図表 2 群を参照のこと。

注 7：概要については、稿末の図表 3 群を参照のこと。

注 8：概要については、稿末の図表 4 群を参照のこと。

注 9：竹森[1978]190 頁。

- - - - -

第 4 章：結

本稿では、本来、西欧で考案された近代保険が、極東の小さな島嶼に技術移転され、東洋の近隣諸国に比して、容易に「自己組織化」されるに際して、福沢諭吉の「創発」効果が、少なからず貢献したことを、進化経済学の立場から論じた。ただし、この命題を、自然現象における若干の事例から定立しているにすぎず、本来的に、社会現象の 1 つである「近代保険制度」が、カリスマ性ももった人物の「創発」から、「自己組織化」あえて周知の 2 つの史実を当座挙げれば、1 つはロマノフ王朝の、レーニン主導による共産革命による崩壊、今一つはワイマール体制(ヒトラーは「ベルサイユ体制」という)の、彼自身主導による「ミュンヘン揆」を契機とした国家社会主義労働者党(NSDAP)による NAZIS 体制への変容、がある していくシミュレーション・モデルは長崎大学経済学部助教授・大倉真人との共同研究として、別稿(高尾・大倉[2002b])で披露予定である。

- - - - -

謝辞：本稿は、文部省科学研究費による共同研究[2001]の筆者担当部を拡大展開したものである。なお、この拡大展開部分(「近代保険の生成過程に関する進化経済学的研究 - 計量

歴史学的アプローチを求めて - 」)には、旧(財)生命保険文化研究所から 1999 年度特別研究助成がなされている。特に、既に解散し、現存しない後者の最後の専務理事・辻坂功男氏の特段の御はからいに深甚なる謝意を表するとともに、成果報告が大幅に遅延したことをお詫びする。また、進化経済学、複雑系の経済学の概要につき、筑波大学名誉教授兼滋賀大学教授・酒井泰弘氏、小樽商科大学助教授・江頭 進氏および神戸大学大学院経営学研究科助教授・村上英樹氏から有益な教示をえた。さらに的確な文献存在につき、流通科学大学教授・田村祐一郎氏の助力を得た。最後に物理学の進化の系譜につき、筆者の中学校時代からの畏友・九州大学大学院理学研究科教授・篠崎文重氏からも懇切丁寧な講釈を得た。これら御四方の名を記して謝意を表したい。本稿にあるうる錯誤・誤謬は、一に報告者にあることはいうまでもない。(本稿は 2002 年 11 月 16 日の関西大学での日本保険学会関西西部会報告原稿である。)

[2002.11.12 633]

参考文献：

天野郁夫[1993]『旧制専門学校論』玉川大学出版部。

江頭 進・依田高典[1996]“Evolutionary Competition of Standard with Random Noise”
進化経済学会誌,創刊号。

江頭 進[1999]『F.A.ハイエクの研究』日本経済評論社。

江頭 進[2002]『進化経済学のすすめ 「知識」から経済現象を読む』講談社。

江戸屋壺店(編)[1994]『骨壺の美 - ふるさとの土にかえる - 』六角出版。

福沢諭吉[1867a]『西洋旅案内』近畿大學世界経済研究所(復刻版[1976])。

福沢諭吉[1867b]『西洋旅案内』ゆまに出版(復刻版[2000])。

五十嵐仁他[編][1999]『日本 20 世紀館』。

李 潤浩[1994]「リスク団体のダイナミズム：カタストロフィ理論の応用」日本リスク研究学会誌 7(1)。

科学シミュレーション研究会[1997]『パソコンでみる複雑系・カオス・量子』講談社。

Kauffman,Stuart 著、米沢富美子訳[1999]『自己組織化と進化の論理』日本経済新聞社。

神戸大学百年史編集委員会[2002]『神戸大学百年史 通史 前身校史』神戸大学。

九鬼修造[1935]『偶然性の問題』岩波書店。

Leibenstein, Harvey[1976]「ミクロ・ミクロ理論、代理人対代理人取引および×効率性」
Dopfer,D. 編著、都留重人監訳[1978],『これからの経済学』岩波書店。

Mainzer,K.(中村量空訳)『複雑系思考』シュプリンガー・フェアラーク東京。

イヴァン・モズリー, トーマス・ムンク(訳者代表 安澤秀一)『コンピュータで歴史
を読む』有斐閣。

Mizushima, K.[2001]“Risk and Japanese Society,” Proceedings of 2nd Asian
Symposium on Risk Assessment and Management, The Society for Risk Analysis,
Japanese Section.

水島一也[2002a]『現代保険経済[第7版]』千倉書房。

水島一也[2002b]「リスクと日本人」日本リスク研究学会誌、14(1)。

村上泰亮[1975]『産業社会の病理』中央公論社。

西尾幹二[1969]『ヨーロッパの個人主義 人は自由という思想に耐えられるか』講談社。

- 酒井泰弘[1991] 『リスクと情報：新しい経済学』 勁草書房。
- 佐和隆光[1982] 『経済学とはなんだろうか』 岩波書店。
- 司馬遼太郎[1988] 『「明治」という国家』 日本放送出版協会。
- Simon, H.A.[1957] *Models of Man Social and Rational* (宮澤光一監訳 [1970]) 『人間行動のモデル』 同文館出版。
- 塩沢由典[1990] 『市場の秩序学 / 反均衡から複雑系へ』 筑摩書房。
- 進化経済学会 (編) [1998] 『進化経済学とは何か』 有斐閣。
- 高尾厚[1991] 『保険構造論』 千倉書房。
- 高尾厚[1993] 「鎌倉仏教と近代保険」 凌霜、320。
- 高尾厚[1985] 「保険の合理的構造と日本人の「心眼」 日本人はなぜ「掛け捨て保険」を嫌悪するのか？」 水島一也 (編著) 『保険文化』 千倉書房。
- 高尾厚[1998a] 「「複雑系の経済学」と保険 「モモ」的世界から「クルーソ」的世界を経て「ワイアットアープ」的世界まで」 『保険とオプション デリバティブの一原型』 第10章、千倉書房。
- 高尾厚[1998b] 「高齢化社会と簡保民営化」 郵政省近畿郵政局 (編) 『少子・高齢化社会に向けての簡易保険の役割』 (調査研究報告書)。
- 高尾厚[1999] 「わが国相互会社における現代的課題 望ましいコーポレート・ガバナンスとアカウンタビリティとを求めて」 ビジネス・インサイト 26、神戸大学現代経営学研究会。
- 高尾厚[2002] 「なぜ近代保険と原始的共済とが併存するのか？ 近代保険普及に関する進化経済学的考察」 『リスク対応様式と文化構造との整合性に関する学際的研究』、1999年度科研基盤研究C(2) 課題研究番号 1630107 報告書、生命保険文化センター。
- 高尾厚・大倉真人[2002a] 「わが国官営簡易保険の民営化に関する一考察」 国民経済雑誌、186(6) [近刊]
- 高尾厚・大倉真人[2002b] 「わが国における近代保険浸透に関するシミュレーション研究 「創発」と「相転移」」 神戸大学大学院経営学研究科ディスカッション・ペーパー 2002・33
- 竹森一則著・伊藤喬編[1978] 「福沢先生と保険」 『日本保険史』 同朋社。
- 田村祐一郎[1985] 『経営者支配と契約者主権』 千倉書房。
- 田村祐一郎[1984] 「簡易保険問題の史的展開(1) - 簡易保険の創設及び戦前における簡易保険の拡張志向 - 」 『所報』 68、生命保険研究所。
- 田村祐一郎[1985] 「簡易保険問題の史的展開(2) 終戦前後から昭和30年代まで」 『文研論集』 71、生命保険文化研究所。
- 陳舜臣[1971] 『阿片戦争、上、中、下』 講談社。
- (財)生命保険文化センター[1976] 『生命保険物語 助け合いの歴史』 (財)生命保険文化センター。
- Zelizer, V.A.R.[1979] (田村祐一郎訳[1994]) 『モラルとマーケット - 生命保険と死の文化』 千倉書房。
- 真継信彦[1985] 「親鸞と蓮如」 水島一也 (編著) 『保険文化』 千倉書房。

-----完-----

ディスカッション・ペーパー出版目録

番号	著者	論文名	出版年月
2001・1	畠田 敬 砂川 伸幸	Stock Price Behavior Surrounding Repurchase Announcements: Evidence from Japan	1 / 2001
2001・2	中嶋 道靖 水口 剛 國部 克彦 大西 靖	IMUのマテリアル・フロー・コスト会計(2000年10月版)	1 / 2001
2001・3	奥林 康司	Japanese Manufacturers Without Factories: Cases of Sony, Matsushita, Misumi, People	1 / 2001
2001・4	國部 克彦 野田 昭宏 大西 靖 品部 友美	Determinants of Environmental Report Publication in Japanese Companies	2 / 2001
2001・5	宮下 國生	Logistics Strategy of Japanese Port Management	2 / 2001
2001・6	坂下 昭宣	機能主義的組織文化論の課題と方法	3 / 2001
2001・7	國部 克彦 梨岡英理子 大工原梨恵	日本企業の環境会計:東証一部上場企業2000年11月現在の実態調査	3 / 2001
2001・8	國部 克彦 倉阪 智子	Corporate Environmental Accounting: A Japanese Perspective	3 / 2001
2001・9	村田 修造	日米経営比較(6) 医療・介護と経営学	4 / 2001
2001・10	矢野 誠 出井 文男	A Trade Model with Vertical Production Chain and Competition Policy in the Downstream Sector	12 / 2000
2001・11	大倉 真人	生命保険における危険分類について 大量性要件と同質性要件とのトレードオフ問題を中心として	5 / 2001
2001・12	大倉 真人	リスク細分型保険は本当に望ましいか?	5 / 2001
2001・13	村田 修造	日米経営比較(5) 日米企業間摩擦	6 / 2001
2001・14	奥林 康司 高階 利徳	大企業OB会会員の職務経歴と再就業に関する実態調査報告書	7 / 2001
2001・15	原 拓志	医薬品の社会的形成	7 / 2001
2001・16	村田 修造	日米経営比較(7) 日本経営の再生に向けて	7 / 2001
2001・17	上林 憲雄	Cultural influences on IT usage among workers: a UK-Japanese comparison	7 / 2001
2001・18	福田 祐一	A Test for Rational Bubbles in Stock Prices	7 / 2001
2001・19	田中 一弘 延岡 健太郎	有効な企業統治改革に向けて:執行役員制と企業の意思決定能力	7 / 2001

ディスカッション・ペーパー出版目録

番号	著者	論文名	出版年月
2001・20	田中 一弘	執行役員制導入によるトップ・マネジメントの変容	7 / 2001
2001・21	大倉 真人	リスク細分型保険は本当に望ましいか？ <改訂版>	8 / 2001
2001・22	田中 一弘	企業統治論序説	8 / 2001
2001・23	大倉 真人	損害防止努力インセンティブに関する一考察 主体均衡分析による検討	8 / 2001
2001・24	國部 克彦 野田 昭宏 大西 靖 品部 友美 東田 明	日本企業による環境情報開示の規定要因 環境報告書の発行と質の分析	8 / 2001
2001・25	國部 克彦 品部 友美 東田 明 大西 靖 野田 昭宏	日本企業の環境報告書分析 内容分析と規定要因	8 / 2001
2001・26	國部 克彦 梨岡 英理子	日本企業の環境会計：東証一部上場企業の実態調査	8 / 2001
2001・27	高木 雅一	Elementary Study of East Asian Corporate and Management System	9 / 2001
2001・28	大倉 真人	保険市場における価格・非価格競争	9 / 2001
2001・29	高尾 厚	なぜ近代保険と原始的共済とが併存するのか？ 近代保険普及に関する進化経済学的研究	9 / 2001
2001・30	大倉 真人	An Essay in the Economics of Post-loss Minimisation: An Analysis of the Effectiveness of the Insurance Law and Clauses	9 / 2001
2001・31	高木 雅一	阪神地域と東南アジアとの連携 相互利益のビジネス機会を探る	9 / 2001
2001・32	上林 憲雄 Harry Scarborough	Cultural influences on IT use amongst factory managers: A UK-Japanese comparison	10 / 2001
2001・33	水谷 文俊 浦西 秀司	The Post Office vs. Parcel Delivery Companies: Competition Effects on Costs and Productivity	10 / 2001
2001・34	大倉 真人	An Essay in the Economics of Post-loss Minimisation: An Analysis of the Effectiveness of the Insurance Law and Clauses <revised version of No.2001・30>	11 / 2001
2001・35	原田 勉	日本における IT パラドクスの再検討 ～ IT 革命の終焉とはじまり～	11 / 2001

ディスカッション・ペーパー出版目録

番号	著者	論文名	出版年月
2001・36	砂川 伸幸	Open-Market Repurchase Announcements, Actual Repurchases, and Stock Price Behavior in Inefficient markets	12 / 2001
2001・37	砂川 伸幸	Corporate Financial Strategy and Stock Price Behavior in a Noise Trader Model with Limited Arbitrage	12 / 2001
2002・1	砂川 伸幸	株式持合いと持合い解消：エントレンチメント・アプローチ	1 / 2002
2002・2	砂川 伸幸	自社株買入れ消却と株価動向の理論	1 / 2002
2002・3	大倉 真人	An Equilibrium Analysis of the Insurance Market with Vertical Differentiation	2 / 2002
2002・4	Elmer Sterken 得津 一郎	What are the determinants of the number of bank relations of Japanese firms?	3 / 2002
2002・5	大倉 真人	レビュー・アーティクル 保険市場における逆選択研究の展開	3 / 2002
2002・6	大倉 真人	Welfare Effect of Firm Size in Insurance Market	3 / 2002
2002・7	砂川 伸幸	投資期間と投資行動 短期トレーダーと長期トレーダーの投資戦略	3 / 2002
2002・8	奥林 康司 高階 利徳	大企業 OB 会会員の職務経歴と再就業に関する実態調査報告書(2) - Y 社 OB 会の実態調査 -	4 / 2002
2002・9	清水 一	課税均衡の存在 不完備市場モデルへの資本所得税の導入	4 / 2002
2002・10	砂川 伸幸	ファイナンシャル・ディストレス・コストと負債のリストラクチャリング 債務免除と債務の株式化	4 / 2002
2002・11	砂川 伸幸	Open-Market Repurchase Announcements, Actual Repurchases, and Stock Price Behavior in Inefficient Markets <revised version of No.2001・36>	5 / 2002
2002・12	忽那 憲治 Richard Smith	Why Does Book Building Drive Out Auction Methods of IPO Issuance? Evidence and Implications from Japan	5 / 2002
2002・13	宮下 國生	International Logistics and Modal Choice	6 / 2002
2002・14	清水 一	不完備市場における課税均衡の存在：公共財供給のケース	6 / 2002
2002・15	清水 一	資本所得税による課税均衡のパレート改善可能性について	6 / 2002
2002・16	奥林 康司	China-Japan Comparison of Work Organization	7 / 2002
2002・17	水谷 文俊 浦西 秀司	The Post Office vs. Parcel Delivery Companies : Competition Effects on Costs and Productivity revised version of No.2001・33	7 / 2002

ディスカッション・ペーパー出版目録

番号	著者	論文名	出版年月
2002・18	音川 和久	Earnings Forecast and Earnings Management of Japanese Initial Public Offerings Firms	8 / 2002
2002・19	竹中 厚雄	海外研究開発拠点の類型化	8 / 2002
2002・20	中野 常男	オランダ東インド会社と企業統治 最初期の株式会社にみる会社機関の態様と機能(1) 改訂版	8 / 2002
2002・21	中野 常男	イギリス東インド会社と企業統治 最初期の株式会社にみる会社機関の態様と機能(2)	8 / 2002
2002・22	水谷 文俊 浦西 秀司	Privatization Effects on TFP Growth and Capital Adjustments	8 / 2002
2002・23	高尾 厚 大倉 真人	わが国簡易保険事業の民営化論に関する若干の考察	9 / 2002
2002・24	水谷 文俊	Privately Owned Railways' Cost Function, Organization Size and Ownership	9 / 2002
2002・25	水谷 文俊 浦上 拓也	A Private-Public Comparison of Bus Service Operators	9 / 2002
2002・26	宮原 泰之	Principal-Multiagent Relationships with Costly Monitoring	10 / 2002
2002・27	砂川 伸幸	Unwinding of Cross Shareholding under Managerial Entrenchment	10 / 2002
2002・28	平野 光俊	社員格付け制度における条件適合モデル 職能資格制度と職務等級制度の設計と運用の課題	11 / 2002
2002・29	高尾 厚	わが国の近代保険導入における福澤諭吉の「創発効果」	11 / 2002